座右の銘

夢みて行い、考えて祈る

今泉　和則　大学院医系科学研究科　医学分野　分子細胞情報学　教授

大学人として私が大切にしている言葉は、山村 雄一先生（元大阪大学総長）が残された名言、「夢みて行い、考えて祈る」です。基礎医学研究を阪大で本格的に始めた頃に耳にしました。ノーベル賞学者も、大記録を達成したプロ野球選手も、夢をもつことの大切さを若者に伝えています。その通りだと思いますし、夢がないとモチベーションを維持するのは至難の業です。大きな夢をもった上で研究を始め、実行するのです。あれこれ考えるよりは行動（実験）し、結果を正確に見ながら考え進めて行く。その先は神のみぞ知り、“至誠天に通ず”と祈るしかありません。私はこのスタイルでどんなに小さな研究テーマにも取り組んできました。結果として、夢の数だけ打ちのめされ失望を味わう苦い思い出ばかりです。しかし、失意の中からわかってくる真実も確かにあります。成功するにせよ、失敗するにせよ、行動しないことには新しい発見は生まれません。夢と行動をもって立ち向かうこと、それが研究の成功に導く唯一の、そして普遍的なアプローチではないでしょうか。

夢を見て研究に邁進する一方で、私たち大学人は人を育てる大切な任務も担っています。人を残してこそ一流と言われるように、研究者としての集大成は、次代の科学を担える人材育成なのかもしれません。退職まで1年余りに迫った私の大学人としての最後の夢は、山村先生の名言を体現できる研究者を一人でも多く残すことです。

素直であれ

服部　　登　大学院医系科学研究科　医学分野　分子内科学　教授

大阪にある北野病院での研修医時代、私が臨床の師とも仰いでおりました当時の呼吸器内科部長から「素直な人は伸びます。服部君も素直な人でいてください。」との言葉をかけられました。当時はその言葉の意味を理解できませんでした。「素直な人」とは、人の意見をすぐに肯定できて、それに追従できるような人、すなわち所謂「イエスマン」のような人なのだろうと勝手に思い描いておりました。しかしながら、今は「素直な人」と「イエスマン」は、全く違う姿勢を持つ人のことなのだと実感しています。

「イエスマン」は相手の意見を肯定するだけであるのに対し、「素直な人」は自分の意見を持ちつつ相手の意見も尊重し、そして自分の意見が誤っていると判断すればそれを修正できるのです。ちなみに、「素直ではない人」は自分の意見しか尊重せず、相手の意見を無視します。これまで「素直ではない人」の周りを「イエスマン」が取り入っている組織をいくつも目の当たりにしてきました。それらは、「素直ではない人」の意見だけで一時的にはうまく運営されたとしても、結局は硬直化して発展性を欠くことがほとんどでした。私は、素直でなければ、医療の現場、研究のフィールド、そして組織においても、最適な解を導くための健全な議論は行えないと確信しています。

素直であることの大切さを悟った今でも、座右の銘として、自分自身に、そして若い医師・研究者たちに「素直であれ」と言い聞かせています。